

コロナ禍の救急搬送

赤谷慶子

如月も終はりに近づきしある休日、九十九歳の老母の入所せる桜新町の施設より、母の体調とみに悪しくなれば救急搬送せばやと連絡ありき。いかなる有様か問ふと血中酸素八十%台に加へ呼吸わりなしと言ひてをり、PCR検査も受けさせばやとの事。救急搬送し受け入るる病院ありやと疑問に思へど、電話の向かふの看護師は焦りて早口にまくし立てたり。二十分も経ぬるほどに再度連絡あり、祐天寺の目黒病院に受け入れ定まれば、即刻入院手続きの為来院すべしとの事。この日は休日にて、在勤するは研修医あるのみ、心不全の疑ひありと言ひたれど、明朝担当医出勤すればCTの検査を実施せむといふ。病院へ赴くと駐車場脇にビニールハウスのごときもの建ちて、ここにてPCR検査を行ふとの由。必要書類にとかく書き込み、翌日再度担当医の診断を聞く事となれり。これまで母は心臓等悪しくなりしたためしはなく、心不全とは異なるかなと考ふれど、九十九歳といふよはひにもあり、母を病院に委ね帰宅せり。看護師よりはコロナ禍に於て、家族と言へども面会許されざれば「ご承知おきたまへ」と言はれき。翌日指定のほどに病院を訪ると若き女医レントゲンの映像見せつつ病状を説き聞かせり。我が思ひし通り、心臓に異常はあらねど肺炎になりし形跡ありと。確かに二年前インフルエンザにかかり、駒沢の旧国立第二病院へ救急搬送せられしをりには肺炎診断せられし記憶あり。女医はいく昨日救急搬送させられし日の夕餉は半分食し、当日の朝餉は完食したれば、よはひの割には体力もあれば週明けには退院せしめばやと少し笑ひつつ話しき。筋肉落ち、施設に戻りし際には体力復元するためリハビリテーション毎日受けねばならぬ由。しからば退院を早めにするべしとの事なりき。施設の主治医には一部始終を仔細に報告せむとのことにて、説明は終はりき。入院より丁度一週間後に老母は退院と相成り。僅かその程度の入院にて母は立ち上がる事ままならぬ有様。然るに頭脳は如何ありやと思いき、吾の顔をしかと認識したれば、安堵せり。この期間吾は数回病院に手続き上来院したれど、コロナ禍に於て得べくんば避けたしと覺ゆ。

(令和四年二月二十七日受附)